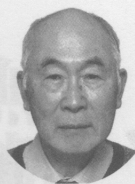


# 収量より多様性尊ぶ

## 遺産に残る南米先住民気質



帯広畜産大学

筒木 潔

名誉教授

新年明けましておめでとうございませう。

2021年の4月以来

「人新世を耕す」という題目のもとに連載記事を書かせて頂いています。新たに勉強しながら書いています。未熟な内容も多いことと思いますが

お許し頂き、いましばらくお付き合い頂けましたら幸いです。

年頭の話題として、私たちの生活に南北アメリカ大陸原産の植物がどれほど貢献しているかというところを紹介したいと思います。

中南米原産の重要な食料作物としては、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、キャッサバ、トマト、トウガラシ、カボチャ、インゲンマメ、ラッカセイなどがあります。果物も多くが中南米原産ですが、有名なものとしては、パイナップル、

パパイア、アボカド、バナナ、レインシなどが挙げられます。嗜好品としては、タバコ、カカオ、ココナラナ、オールスパイスなどがあります。

繊維素材のワタは旧世界のモンゴロイド遺跡で発掘されたもの他に、中南米でも独自に数千年前から栽培されてきました。

私たちの生活を潤してくれる花卉類としては、モンソーフール監修「花図鑑」(西東社2011)に載っていた132種類の花類のうち30種類が南北アメリカ原産のものでした。

それらの中には、ココナラナ以降ヨーロッパに伝えられ、さらにアジアや日本にも伝播してきました。しかし、ココナラナ以前に旧世界に伝わったものがあります。それはサツマイモとアサガオで、どちらもヒルガオ科に属しています。

その中でなじみ深いものとしては、ヒマワリ、

ダリア、コスモス、マリナーゴールド、センニチコウ、アジサイ(アナベル)などがあります。実ものは15種中5種類、葉ものは25種類中6種類が南北アメリカ原産でした。

もし現代にこれらの植物が無かったとしたら、私たちの生活はどんなに味気ないものとなってしまっしょうか。

これらの食料や植物のほとんどは、ココナラナ以降ヨーロッパに伝えられ、さらにアジアや日本にも伝播してきました。しかし、ココナラナ以前に旧世界に伝わったものがあります。それはサツマイモとアサガオで、どちらもヒルガオ科に属しています。

これらは南米の先住民

自身によって、南太平洋のポリネシアの島々に伝えられ、そこからアジアや中国、日本に伝播したようです。

サツマイモについてはヨーロッパ人によって運ばれたものの方が主流ですが、アサガオについては奈良時代に既に日本に伝来していたので、最初に南米先住民によって伝えられたルートを想定せざるを得ません。

サツマイモのことをイースター島などのポリネシア語では「クーマラ」と呼び、インカ王国の民族の言語ケチュア語では「クマラ」ないし「クマル」と呼んでいたので、両者の密接な関係が推察され

ます。  
アサガオの用途はもと

もと兼用であったものが日本では花を楽しむものになり、多種多様なアサガオが育種されました。南北アメリカ大陸の豊かな植物相の要因としてアマゾン平原がありま

す。ここには熱帯雨林と広大で肥沃な沖積平野があります。またヨーロッパ人によって侵略される前は数百万人の先住民が生活し、森の中に「テラプレタ」といわれる肥沃な農耕地を造り、熱帯雨林の中から選び出した多様な作物を栽培していま

した。  
先住民は長老から子供に至るまで、森の植物や生物に関する広くて深い知識を備えていたそう

です。これらの先住民の中には航海の技術に長けて

いた民族があり、アマゾン平原で育種された作物が南米のアンデス文明地帯や中米・北米にも伝えられたと考えられます。コロンブスに最初に接触したのも、このような民族のひとつアラワク族でした。

アメリカ先住民は栽培作物の多様性を専ぶ習慣を持っていました。ジャガイモ、トウモロコシ、トウガラシなども非常に多くの品種を栽培しており、優秀な品種を選ぶという方向性ではなく多様な品種を余すところなく一緒に栽培するという習慣をもっていました。そのことにより、高低差のある多様な環境に適応することや、病害虫の被害を軽減することができま

ら。

した。  
現代の育種においては当然優秀な品種の育種が追求され、その方法においても遺伝子操作が導入されて、あらかじめ設定された目標に最短最速で到達できるような育種技術が求められていること

と思います。  
その反面、作物の多様性という観点からは退行しているのではないのでしょうか。より持続的な食料の未来を構築するためには、アメリカ先住民にならって多様性という観点をふたたび導入することも必要ではないかと思

います。日本人はもとも「変化アサガオ」にもみられるように変種を愛でる人々なのです